

仁王さまの夜遊び

長野県

むかし。

立石寺の仁王さまは、朝から晩まで仁王門の中に立っているのが、たいくつでたまらなくなりました。

「昼間は人に見られるから具合が悪いが、夜くらいは、ちっとは遊んで歩いたってかまわないだろう」と考えて、仁王さまは、こっそり夜遊びに出かけるようになりました。はじめのうちは、お寺の近くをぶらぶらしていましたが、そのうち、だんだん遠くまで出かけるようになって、村のほうまで遊びに行くようになりました。

ある晩のこと、仁王さまは、いつものように仁王門からぬけ出して、村のほうへぶらぶら歩いて行きました。すると、一軒の家から、明りがさしていました。そうっと近寄って、しろうじの穴からのぞいて見ると、おばあさんが、糸車で、ブンブンブンと、糸を繰っていました。仁王さまは、はじめてそんなものを見たので、めずらしくて、一生懸命のぞいていました。

しばらくすると、おばあさんが、ぶーっとひとつ、大きなおならをしました。それがあんまりおかしかったので、仁王さまは、思わずくすくす笑いました。

おばあさんは、その声を聞いて、村の若い衆でものぞいているのかと思って、

「におうか」とききました。

仁王さまはびっくりしました。

『仁王か』というところを見ると、おれがここにかくれていることを、ちゃんと見通したにちがいない。恐ろしいばあさんだ」

仁王さまは、そういって、急いで逃げて帰って、元のとおり門の中に入って、知らん顔をしていましたとさ。

村上郁再話

資料『伊那民俗叢書2』伊那民俗研究会編／信濃郷土出版社